

あとがき

塗り込められたモノクロームの空間で

今回の展覧会は桑山忠明 Kuwayama, Tadaaki (1932-) の最新作 1989-90 の大作 4 点を展示しご覧いただくものである。桑山さんは名古屋の生まれで東京芸大日本画科を 1956 年に卒業、1958 年に日本を離れて米国に渡り、今日までニューヨークで、一貫して抽象絵画の道を行ってこられた作家である。展覧会歴、美術館コレクションのリストをご覧いただくと、桑山さんが米国、日本、欧州と広い範囲で、活躍されていることがお分かりいただけると思う。

この展覧会のカタログのテキストは本江邦夫さんをお願いし、「桑山忠明——単位について」と題する論稿をご寄稿いただいた。厚く御礼申し上げます。

今回の作品は 8 フィートの正方形の大作 3 点と 4 フィートの正方形の中ぶりの作品 1 点計 4 点の展示である。前者 3 点はメタリックな黒っぽいグレイの作品であり後者 1 点はメタリックな濃いブラウンの作品で、これら作品は当画廊の空間を意識して作成され展示されている。これら作品をみて気付くことは第一に、色彩がモノクロームであること、それも重いメタリックなグレイとブラウンであることである。第二にそれらメタリックな色彩が丁寧に作家の手で塗り込められていることである。無機的な人間の手を感じないカラリとしたドライな感じではなく、手のおいぐ濃くたよっている。モノクロームではあるが表情がある。第三にこれら作品は単なる平面ではなく、厚みをもった半立体の作品であるということである。第四に、これら半立体の 4 点によって展示空間が成立していることである。

この展示された画廊空間に立ち、これら一群の作品を眺めると私は一種の絶対的、根元的な空間に身を置いているのを感じる。ミニ

マル・アートの空間に置かれているのを感じる。毎日、ゴタゴタとつまらぬことで一日を過ごしている私は、突然この空間に身を置くとしばらくは茫然として言葉がない。別世界に自分がいるのを感じる。われわれにそのように感じさせる場を作る、それが芸術家のしごとだ。まさしく、ここに桑山忠明の芸術が存在する。たじろぐことのない作品の力をここにみる。

桑山忠明夫妻は 4 月下旬に来日され、5 月 7 日の当画廊のオープニングパーティに出席、しばらくわが国に滞在の予定ときく。今後ますますのご健勝をお祈りするものである。

1990 年 4 月 5 日
佐谷画廊
佐谷和彦

追記

ニューヨークの The Limited Edition Club (代表者 S. Shiff 氏) から近く川端康成「雪國」の限定豪華本 (375 部) の出版が予定されている。翻訳はサイデンステッカー氏で、桑山忠明のエッチングが 5 点挿入され、本江邦夫の解説という面白い組み合わせの本である。これと同時に桑山忠明のエッチング 6 点 (うち 3 点はひと組み) 入りのポートフォリオが 40 部限定で刊行される。

このエディション・クラブはすでに次のようなアメリカの著名作家の版画を挿入した豪華限定本を出版していることを紹介しておきたい。
W. デ・クーニング： 17 点のリトグラフ： F. オハラ，“詩”
R. マザーウェル： 26 点のリトグラフ： O. パス，“3つの詩”
R. ライマン： 6 点のアクアチント： S. ペケット，“NOHOW ON”
R. マップレスールプ： 8 点の写真： A. ランボー，“地獄の季節”
etc.

川端康成と桑山忠明の組み合わせでどのような本が出来上がるか、ポートフォリオの版画作品ともども期待される場所である。